

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02620

研究課題名（和文）フリードリヒ・シュレーゲルにおける有機体の思想

研究課題名（英文）Der Begriff des Organischen bei Friedrich Schlegel

研究代表者

武田 利勝（TAKEDA, Toshikatsu）

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：80367002

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、世紀転換期におけるフリードリヒ・シュレーゲルの思想の特徴を「化学的なもの」から「有機的なもの」への転回のうちに捉えることから出発した。そしてシュレーゲル個人におけるその変化の内的必然を、初期の哲学断章群と中期の哲学講義の読解を通して明らかにする一方で、カントの批判哲学、ゲーテの「万有小説」構想、ヘルダーのポエジー論、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの「芸術の自然史」等を参照することで、「有機体」の理念をめぐる1800年前後の思想的布置を描き出すことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

観念論と實在論の統合を目指したポスト・カント時代の批判哲学を、フリードリヒ・シュレーゲルというひとりの個性を通して検討することは、すなわち従来峻別されてきた哲学研究と文学研究のあいだの垣根を取り払う試みでもある。

近年、M. ガブリエルを中心とした新實在論が世界的に注目されているが、シェリング研究を思想的出発点としたこの潮流もまた、哲学と文学の有機的統合を基盤としているように思われる。

1800年前後のシュレーゲルにおけるポエジーと哲学の統合としての有機的なものの理念は、その意味においても、現代にいたってなおアクチュアリティを失っていない。

研究成果の概要（英文）：This study started by capturing the characteristics of Friedrich Schlegel's thoughts at the turn of the century from "chemical" to "organic." While the internal necessity of the conversion in Schlegel individual was clarified through the analysis of his "Fragmente" of the preromantic era and the medium-term philosophical lecture, it tried to represent philosophical constellation around 1800 on the basis of the idea of "Organic" by referring to Kant's critical philosophy, Goethe's "Roman des Weltalls" conception, Herder's poetics, and August Wilhelm Schlegel's "Naturgeschichte der Kunst".

研究分野：ドイツ文学

キーワード：シュレーゲル兄弟 ドイツ・ロマン派 有機体 ロマン的ポエジー

1. 研究開始当初の背景

報告者は初期から中期にかけてのフリードリヒ(以下 Fr.)・シュレーゲルの思想を主たる研究対象とし、特にその思想の核心が「植物的有機体」の理念にあることを指摘してきた。その際、真先に注目したのは彼が用いる「合生(zusammenwachsen: 合わさって生長する)」の概念である。「合生」は、相異なる複数の事物がその差異性のままに単一体を形成しながら生長することの表現であり、文字通り、植物の有機的生長から転移された術語である。

このように多様性と統一性を統合し、かつ無限の生長へと開かれた「合生」の概念を手がかりとして、報告者はかつて Fr. シュレーゲルのゴシック建築論や数々の批評的テキストを分析した。さらに本研究開始時においては、シュレーゲルが 1800 年にイエーナ大学で行った講義『超越論的哲学』とその周辺テキストの分析に取り組みつつあった。

2. 研究の目的

アテネウム期の遺稿断章において、Fr. シュレーゲルはこう書く「批判哲学がいかに完成されたとしても、それは化学的完成であって、有機的完成ではない」。あらかじめ本研究の目的を大雑把に述べれば、カントからフィヒテへと連なる批判哲学の流れを、シュレーゲルがいかにして「有機的完成」にもたらそうとしたかを検証することである。

『超越論的哲学』は種々の哲学的概念(「無限なもの」や「意識」等)を素材とし、それらの結合と分離のなかから新たな要素を産出しつつ展開する一種の化学的実験をモデルとしている。この発想はルネサンス的錬金術あるいはライブニッツ的普遍記号学を基礎とした「結合術(ars combinatoria)」の伝統に連なる。だが Fr. シュレーゲルは、こうした化学的で人工的な手続きを経由したうえで、「有機的なもの」という哲学の更なる次元へと移行しようとした。換言すれば、化学的な実験のなかから有機的な何ものかが生成せねばならない。この生成の有様は「発生論的(genetisch)」と称される。これは有機体論的な個体発生を示す語である。

哲学のかかる有機性を、Fr. シュレーゲルは他者への「伝達(Mitteilung: 分有)」のプロセスにも見出そうとする。いかなる他者理解も「発生論的」な営みであると言う時、それは完成された知識・情報を他者に転移することではなく、自他の相互的な「受粉」であり、「萌芽」であり、そして「開花」へと至る有機的なコミュニケーションのことである。

Fr. シュレーゲルが 1800 年前後に書いた断章の一つによれば、18 世紀が「化学的時代」であったのに対し、来るべき 19 世紀は「有機的時代」でなくてはならない。フランス大革命に集約される 18 世紀の一連の事象が化学的な反応を惹起し、それは多大な犠牲を強いることとなった。このことから、いかに Fr. シュレーゲルが「有機的なもの」を新たな時代の課題と見なしていたかがわかる。しかし、それは単に彼一人の問題だったのではなく、世紀転換期における時代の傾向でもあったはずである。そうであるならば、彼のテキストもまた時代のさまざまな声の一つと見ることなしに、その普遍性と独自性を明かにすることはできない。

このような考えに基づいた本研究の目的は、第一に Fr. シュレーゲルのテキストの内在的な読解を通してその内容を広く紹介することであり、第二に同時代の他の思想家たちとの比較を通してその独自性を問い直すことである。

3. 研究の方法

2017 年度から 2019 年度の期間中、本研究は以下の方法を通して進められた。

2017 年度

Fr. シュレーゲルの有機体概念の核心と全容を理解するうえで不可欠と思われる 1804 年から 05 年にかけての講義『哲学の展開』のうち第 1 講義(哲学の特性描写と歴史)および第 5 講義(自然の理論)また同時期の講義『序説と論理学』第二部「存在論」を訳出し、一部を「哲学の特性描写」と題して訳注とともに発表した。そこでシュレーゲルは、哲学の種類を経験論・懐疑論・唯物論・汎神論・観念論に分類し、それぞれの相互関係を発展的に特性描写してゆくのであるが、とりわけ有機体思想の理解にとって重要なのは、汎神論と観念論の関係である。

また当該研究と間接的に関わる研究として、日本独文学会シンポジウム「親密さの言語」にパネリストとして参加した。報告者は 18 世紀後半における「友情」についての言説を、特に前口マン派期の K.Ph. モーリッツの書簡論を通して分析したが、この研究によって、啓蒙主義から口マン主義への思潮の変化が個体間の有機的な関係に与えた影響についての知見を得た。

さらに、Fr. シュレーゲルの有機体思想を同時代の思潮との関連において見直すため、シラーがその人間学において展開した「全的人間」の理念に着目し、とくに初期の医学論文「人間の動物的本性と精神的本性の連関についての試論」の翻訳プロジェクトを監訳者として進めた。

2018 年度

日本独文学会シンポジウム「詩と哲学の饗宴 1800 年前後の総合的思考の生成」にパネリストとして参加し、Fr. シュレーゲルにおける「宇宙のポエジー」としての「ロマン的ポエジー」構想をいわば準備するものとして、ゲーテの「万有小説」構想を分析した。有機体の思想がその

重要な背景とする汎神論的思考は、ゲーテ初期のプロジェクトにおいて、近代的自我の意識との調和にもたらされることがなかった。そのため、「万有小説」構想は挫折せざるを得ない。しかしFr.シュレーゲルにおけるロマン的ポエジーは、フィヒテ的自我と汎神論的思考との統合を通じて、ゲーテにおける挫折を乗り越える試みとして評価されることを明らかにした。

この研究はシェリング協会におけるクロス討論「文学的絶対」へと展開する。本討論での報告において明らかにしたのは以下のことである。シュレーゲルにおける有機体の思想は、一にして全なるスピノザ主義的汎神論を哲学体系の中心に据えつつも、その中心点から無限に逃れようとする意識の運動性を取り込むことによって、円周の創造とその破壊を無限に繰り返すという、一種のカオスの思想としてあらわれる。そしてそのカオスは哲学を体系の可能性と不可能性のあいだに生成せしめる。こうした哲学の生成は、発信者と受信者のあいだの理解可能性を志向しつつ、一種の共同的な営みとして無限に展開してゆく。理解可能性と理解不可能性を同時に含むこむこの伝達の営みこそ、シュレーゲルにおける有機体の思想の核心である。

さらに、日本英文学会九州支部シンポジウム「詩と革新」にパネリストとして参加し、ドイツ・ロマン主義研究の立場から、アウグスト・ヴィルヘルム(以下A.W.)・シュレーゲルにおける「芸術の自然史」構想についての報告を行った。この報告では特に言語の有機的生成という主題を分析したが、これにより本研究全体の重要な補助線を得ることができた。

2019 年度

『アテネウム』刊行前の1796年にFr.シュレーゲルが書き残した哲学断章群を、とりわけ同時期(自然哲学以前)のシェリング哲学、特に『批判主義と独断主義についての哲学書簡』を参照軸としながら分析した。その一方、前年度に引き続きA.W.シュレーゲルの「芸術の自然史」構想についての分析を進めることによって、研究の軸足は初期ロマン派における言語感性論・言語起源論へと移していった。この研究は、もちろんFr.シュレーゲルにおける有機体の思想と本質的に関連するものである。

また『イデーエン』『フマニテート書簡』をはじめ、1790年前後のヘルダーのテキスト群を分析することによって、有機性やポエジーをめぐる前ロマン派期の思想についての理解を深めた。

当該年度後期からシュレーゲルの小説『ルツィンデ』の分析に着手し、目下その全体の翻訳作業に従事中。このテキストは本研究の出発点でもあった『超越論的哲学』における有機体の理念の文学的表現として重要である。

4. 研究成果

以上の研究を通して得られた成果を、章立てにして説明する。

(1) Fr.シュレーゲルにおける有機的なものへの志向

先に紹介した通り、世紀転換期のFr.シュレーゲルはこう述べている。「批判哲学がいかに完成されたとしても、それは化学的完成であって、有機的完成ではない」。さらに同時期の断章では、「化学的時代」としての18世紀には、「有機的時代」としての19世紀が続くべきであるとされていた。時代が、またその時代の表現としての哲学が「化学的」であることは必然であり、またさしあたり必要でもある。だから、まずは「化学的」な完成が目指されなくてはならない。しかしそれは、「有機的」な完成に向けたプロセスにとどまらなくてはならない。これがFr.シュレーゲルにおける有機体の思想を特徴づける際、まずもって踏まえておくべき観点である。すなわち、有機的なものへの志向は、シュレーゲルにおいて化学的なものの完成のプロセスにすでに内在しているのであり、したがって1800年前後に彼が試みた文学的・哲学的実験 前者の代表例が『ルツィンデ』であり、後者のそれが『超越論的哲学』であることは論を俟たない。は、いずれもそのような傾向のもとに捉えなくてはならない。

(2) 批判哲学から超越論的哲学へ

1796年の遺稿断章のひとつに、Fr.シュレーゲルはこう書く。「認識可能性の限界の彼岸での一切の定立は超越的であるという主張はそれ自体矛盾しており、またあらゆる哲学を終わらせてしまう[...]。同時に此岸と彼岸とにいるのでない限り、いかなる限界も規定しえないのである。したがって我々が何らかの方法で[...]限界の彼岸に到達しえていない限り、認識の限界を規定することは不可能である。」

シュレーゲルの理解によれば、カント・フィヒテの批判哲学は意識性と恣意性(フィヒテの場合は自我の同一性)の支配する此岸のみに立脚している。それに対し、彼はおのれの立脚点を彼岸なる無限性と此岸なる有限性の両方に求め、その中間を定めることから哲学を出發させようとする。哲学は有限性からでなく、また無限性からでもなく、「叙事詩と同様、中間から出發しなければならぬ」のである。これが恣意的な化学的操作に終始する批判哲学を、無意識性あるいは無限性の原理へと打ち開き、そのようにして超越論的哲学へと発展させるべく、シュレーゲルがみずから最初に定めた立ち位置である。この立場は独断主義と批判主義の統合を試みたシェリングと同じであるが、シュレーゲルの場合、のちの有機体の思想の萌芽ともいえるべき着想が見いだされる。それは哲学の根底に「相互概念」、すなわち相対立する二つのものの分離と結合のダイナミズムをおいたという点である。この二極の関係のなかからあらゆる個体が産出され

るという意味で、シュレーゲルの哲学はその初期からポエジー = ポイエーシスの原理を含んでいたことが明らかとなった。

(3) 万有小説と宇宙のポエジー

ゲーテが1780年後に構想していた「万有小説」は、ビュフォンによる自然史の金字塔『自然の諸時期』を、長編小説という新たな形式によって凌駕することを目指したものであった。ところがH.ブルーメンベルクも指摘する通り、この試みは挫折する。本研究はそれが挫折した理由を、ゲーテ自身の汎神論的思考それ自体のうちに見出した。宇宙のなかに没入し、万有と一体化した主体はもはや主体性を失っている。そこには無限なるものがあるのみであって、意識は存在しない。そのような状態を目指す限り、ゲーテの構想は失敗に終わらざるを得ない。本研究はしかし、この挫折にこそFr.シュレーゲルにおける「宇宙のポエジー」としての「ロマン的ポエジー」のプロジェクトの萌芽があることを明らかにした。すなわち、この二つのプロジェクトはいずれも汎神論的思考を中心に据えているが、Fr.シュレーゲルにおいてはもう一つの中心として、批判哲学における主体的意識が明確に指定されているのである。「万有小説」構想のただなかにあるゲーテにも、やはり近代的自我の意識の予感 は明らかに存在した。しかし彼において、それを汎神論と対立的に結合させる発想はまだなかったのである。

Fr.シュレーゲルがその最初期から思想的基盤としていた二極性という観点は当然「宇宙のポエジー」を構成するのみならず、そのまま『超越論的哲学』における二つの極、すなわち熱狂と懐疑へと展開する。熱狂と懐疑との緊張関係のなかで描き出される円環、それも「中心はいたるところに持ちつつも円周をどこにも持たない円環」、これが哲学である。この円環の比喻は伝統的に神即世界を表現する汎神論の定句であったが、シュレーゲルにおいてはそこに批判哲学的懐疑というもう一つの極が入り込むことによって、神ではなく哲学が、それ自体創造しつつかつ創造される世界となるのである。

このように、ビュフォンの自然史からゲーテの「万有小説」、そしてシュレーゲルの超越論的哲学までを一本の線、それも大いなる断絶を孕んだ線のもとにおいた時、『哲学の展開』第5講義「自然の理論」において表現される巨大なコスモゴニーは、なるほど従来指摘されてきた通り、シュレーゲル自身の哲学的展開のなかでは異質な性格を持つものではあるが、しかし、18世紀後半から19世紀初頭にかけての自然史の構想、およびその哲学的・文学的受容がいかに豊かなものであったかを示す、きわめて重要な思考として際立ってくる。すなわち世界自我の根源的生成を記述するシュレーゲル独自の自然哲学は、ビュフォンの自然史をモデルとしたうえで、自然汎神論と批判哲学的観念論との統合の試みなのである。

(4) 芸術の自然史 補助線としてのA. W. シュレーゲル

ビュフォンの『自然の諸時期』によって、自然の空間的把握としての博物誌(Naturgeschichte)から「自然の歴史学」としての自然史へと転回は決定づけられた。そしてこうした意味での「自然史」の理念を、そのまま芸術の歴史のアナロジーとして取り入れたのが、A. W. シュレーゲルの「芸術の自然史」構想である。言い換えれば、それは芸術という自然の起源史である。

芸術と自然という相対的な二項を結びつける契機は、A. W.シュレーゲルによれば、「ポイエーシス」の概念である。「ポエジー(ポイエーシス)という不滅の精神」は、地域・時代に応じてその身体をさまざまに変え、作品という身体のうち現象するのである。

こうした芸術の自然史において、創造原理としてのポエジーはひとつのプロテウスとして考えられており、その点において、A. W. シュレーゲルの思想はヘルダーのポエジー論を継承していることがわかる。ただし、(3)の万有小説とロマン派思想との違いと同様、シュレーゲル兄弟は、このヘルダー的なプロテウス(ヘルダーはこれをゲーテ同様、スピノザ的な実体として理解している)にも批判哲学的な観点を導入しようとした。それなくして、個体としての芸術作品に自由はないのである。

この研究では、人間精神の自由と、人間身体の必然という二極によって形成される新たな有機体が問題になる。それはA. W.シュレーゲル初期の言語論に批判を加えたシラーの言葉によれば、精神性と身体性の統合によって成り立つ「全的人間」の理念を基盤とした有機体であり、ただ自然の有機体を意味するのではもちろんない。「全的人間」という18世紀後半の医学哲学的な鍵概念が、シラーによる批判を通してロマン派の有機体思想の形成に重要な役割を担っていることは注目に値する。

ドイツ・ロマン主義における有機体思想を理解するうえできわめて有意義な補助線ともいえるA. W.シュレーゲルの言語感性論について執筆済みの論文は、2020年度内に刊行される予定である(刊行日未定)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 27
2. 論文標題 予見の体系、あるいは来るべき体系の予見 フリードリヒ・シュレーゲルにおける哲学の実験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 50 - 59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 115
2. 論文標題 翻訳：フリードリヒ・シュレーゲル「哲学の特性描写」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 57 - 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田利勝	4. 巻 31
2. 論文標題 翻訳（監訳）：フリードリヒ・シラー「人間の動物的本性の精神的本性との連関についての試論」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州ドイツ文学	6. 最初と最後の頁 1 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 詩と哲学の饗宴 1800年前後における総合的思考の生成
3. 学会等名 日本独文学会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 ラクー=ラバルト/ナンシー『文学的絶対』 フランス現代思想とドイツ初期ロマン主義の邂逅
3. 学会等名 日本シェリング協会クロス討論
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 詩と革新
3. 学会等名 日本英文学会九州支部シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 親密さの言語 18世紀の人間関係の表現とその読解の試み
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 「『思想』のヘルダー特集を批評する I」
3. 学会等名 ヘルダー学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武田利勝
2. 発表標題 アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルと言語感性論
3. 学会等名 基盤研究(C)17K02255「ブネウマからガイストへ 古代ギリシアからゲーテにいたる人間三元論の系譜」(研究代表者:茶谷直人)ワークショップ:近代ドイツにおけるガイスト概念の諸相(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----